

(翻訳) ジョージ・ギッシング「煽動者」

八幡 雅彦

Japanese Translation of George Gissing's "The Firebrand"

Masahiko YAHATA

18歳の時にアンドリュー・モウブレイ・キャタリックは縁者、知人の間から姿を消した。ロンドンに行ったことがまもなく判明したが、この逃避行はずっと以前から予想されていたために北部の住民たちは何ひとつ騒ぎ立てることはなかった。ロンドンが手に負えないということが分かれば奴は舞い戻って来るだけでいいんだ、と。母親は年間400ポンドの遺産を受け取りながら悠々自適の生活を送っていた。死後、それはアンドリューとその妹に分配されることになっていた。誰を非難することもなく、また誰の賞賛を要求することもなく、自ら決意を固め、無言で実行に移したというのはこの若者が自画自賛している点だった。たとえ彼はこれまで人々から高い評価を得ることはなかったにしても、恥ずべき行為は何一つなかった。偏見を持たない知人たちが言うには、いくぶん怠け癖があつて、多少自画自賛のきらいがあるということだった。しかし、その頭の良さを否定する者は誰ひとりとしていなかった。マプルベック⁽¹⁾のように、炭坑労働者に取り囲まれた小さな灰色の煤けた町ではおそらくあいつの出る幕はあるまい。あの、いわゆる「多弁の才」は遅かれ早かれトラブルに巻き込まれるのが落ちだろう。役所勤めの若造が政治などに首を突っ込むべきではない。それに坑夫が出入りするような酒場で演説をぶったところで何の効果があるというのか。あいつにはもっと広い世界で頑張ら

せておけばいい。5ポンドかそこらがあいつの持って行った財産だ。しかし有能な連中ならもっと少ない金を持って上京し、成功を収めている。

18歳から23歳まで確かにアンドリューは苦難の時代を過ごした。手紙を書くことも滅多になく、たまには里に戻って来いという誘いも拒絶するのだった。彼から届くわずかな知らせは疑わしい類いのものであった。どうにか生計を立てていることは明らかだったが、それがどのようにしてかはマプルベックの住人たちは誰ひとりとして正確には知らなかった。しかし、この若者は23歳の誕生日に手紙を寄こし、ロンドンのふたつの新聞社の契約記者として定職を得たことを知らせた。やがてほどなくその仕事の見本を送り始めて来た。彼の母親は市書記官⁽²⁾の未亡人であり、彼女自身マプルベックの保守社会から非常に尊敬されているということもあつて、息子が革命の見解に固執しているのを悲しく残念に思うのだった。彼女は息子が送って来る新聞をよその家に配布する気にはなれなかった。一方、隣町の弁護士と婚約中だった妹のバーサは兄がそこまで出世したことを誇りに思い、兄がいい職さえ得てくれればどのような見解を持とうと構わないと彼女は断言するのだった。まもなくこの新聞記者は、彼自身によれば現在注目を浴びているという一連のニュース、つまりロンドンその他の土地でのいかがわしい産業に関する取材記事を送って来た。と同時に、

休暇を取って帰省することを知らせてきた。

それ以後ニュースはばったり途絶え、二、三カ月が過ぎた。そして、九月のある日の夕方、アンドリューは母の家の戸口に忽然と姿を現した。

彼はまるで別人のようだった。歳月は、骨張ったひょろ長の若者を、スラリとした筋金入りの、顎髭をたくわえた男の見本へと変えていた。が、彼は哀れなほど衰弱し切った様子であり、そのため母親は驚きの第一声を上げた。まるで旅によって酷使されたかのように彼は手近の椅子に倒れ込み、土気色の顔から汗を拭った。ああ、なんて哀れな子なんでしょう、この子は働き過ぎなんだわ、きっと長く十分な休養が必要なんだわ……。

母と妹はすぐさま彼の看護に当たった。彼の子供時代の友人である、顔なじみの医者が見診に呼ばれた。アンドリューは落ち着き払った、偉ぶった様子で、しかし周囲の親切にはさも感謝しているというふうに、医者に語りかけるのだった。

「睡眠ですって。ああ、いとしの先生、ぼくはほぼ1年寝ていませんよ。睡眠なんて高価な贅沢です。出世を目指す新聞記者には寝てる暇などありません。食事ですって。ああ、すっかり忘れてました。確かに、時々食ってます。あ、そう、そう、そう、最近、ナショナル・リベラル・クラブで『モーニング・スター』の編集者といっしょに食事をしました。だから、その時はとにもかくにも食いましたよ。でも、いいですか先生、たいいていの日はアンチョビー・トースト1枚⁽³⁾にコニャック1杯というのがぼくにとっては一番の御馳走なんです。ぼくはヴァッシュ・アンラジェ⁽⁴⁾で胃をこわしたと思ってるんです。」

「いったい何だい、それは。」と善良な医者。「飢えを意味する単なる気取った言い方ですよ。3、4年間はただ食えなかったというだけの話です。ぼくのまわりの連中はみんな経験しているんです。ぼくの友人の小説家などは、最初に飢えを経験しない奴なんて全然たいしたことはないとまで言ってますよ。それと同時に、ぼ

くはちょっと酒を飲み過ぎました。先生は何を飲むんですか。とにかく精神力の勝負ですからね。」

医者は、彼の飲み過ぎの習慣はまだ断ち切られてはいないのであるという疑惑を感じ始めた。彼は、アンドリューの衰弱状態は本当に働き過ぎと関係があるのだろうかとの心の中で疑った。しかし、3日とたたないうちにその疑いは間違いであると確信するに至った。キャタリックの症状から下すことのできた診断はただひとつ。それは、常軌を逸脱した生活、しかし放蕩者にはあらず、ということだった。彼は、反抗的性質のあらゆる忠告を無視して、機械のように働いていたのだった。

「ところでアンドリュー、君はそんな生活を送っていて、墓場以外の何処に行き着くと思っているのかね。」

「ええ、体が持たないってことがぼくには分かったんです。でも今のところそれが報われるんですよ。ぼくは編集者たちの間ではちょっと知られてるんです。今日じゃあ、先生、どんな職業でも成功を目指すんだったら、成功か、死か、どちらかで満足しなくちゃならないんですよ。ぼくは、もし雑魚の群れから抜け出せないんだったら、死んだ方がましです。」

こうした彼の話を、昔なじみの開業医は面白がって聞いた。というのも、彼はこの患者を少年とみなしており、最近はやりの少年特有のうぬぼれを見て取ったからである。しかし誰もがアンドリューの話を品良く聞いてくれるわけではなかった。将来の義理の兄の知己を得るためにやって来たロバート・ホールズワースは、軽蔑的怒りを隠すのに相当な苦勞をした。彼はアンドリューの行いがそこまでやすやすと認められてきたことを嫌悪し、こいつは悪名高きペテン師ではなかろうかと半信半疑に思ったほどである。パーサとふたりきりになった時、彼は、どうして君の兄さんはそんな長い年月の間身内を訪れなかったんだい、と尋ねた。「ああ、」娘は笑いながら答えた。「そのことだったらね、兄さん昨日初めて告白したわ。人々の話題になるようなことができないうちは、プライドが許さ

なくて帰って来られなかったんですって。]

「プライドの強さが君の兄さんの一番の特徴のようだね。」ホールズワースは冷めた口調で言った。「ところで君の兄さんは何をやったというんだい。匿名の新聞記事をちょこっと書いてただけだろ。それであそこまで自信家になるなんておかしいよ。」

「兄さんは本当に大袈裟なのよ。でもいい、あなた、兄さんは恐ろしいほど働いてきたのよ。」
「君の兄さんに限らず、随分多くの人々がそのように働いてきたと思うがね。」

「それはそうだが。でも、ロンドンの新聞に記事を書けるなんてすごいことだと思わない。それに、兄さんはとても多くの重要な人々と知り合いなのよ。」

アンドリューは、マブルベックへの自分の帰省が、地元の新聞によって知れ渡るよう手を打った。コラムには彼の短い伝記が掲載された。筆者は、キャタリック氏が当分の間あらゆる執筆業を禁じられていることに深い遺憾の意を表す、と述べた。そして次のように付け加えた。

「これは、余りにも数多くの新進気鋭の新聞記者たちが受けねばならぬ処罰である。現代のジャーナリズムの状況は恐ろしいほど苛酷であるが、キャタリック氏のように若く卓越した才能の持ち主は、人間本来の限界を越えた努力に挑むものである。」

旧友たちは、十人中九人までが極めて節度のある実際の連中だったが、彼らの前でアンドリューは彼の進歩的意見を仰々しく披露するのだった。彼はこの善良な連中に、マブルベックはまったく活力のない小都市で、自分がその最先端に行く文明よりも約1世紀も遅れていることを悟らせるのだった。それは時として突っけんどんな返答にも出合ったが、彼はただ笑ってあしらうだけだった。俺がマブルベックから姿を消して以来今日までどれ程ものすごい進歩を遂げたか、それさえ分かってもらえれば俺はなんと言われたってかまわない……。彼は普通に会話するよりも、大抵は立った姿勢で、ひとり熱弁をふるうのを得意とした。地元の出来事について彼が尋ねるときの口調は寛大そのもの

だった。恐れ多くもこの新聞記者氏は、町にまだ残っている若者たちや彼と同世代の住人たちの消息に関心を示し給うた。

「ああ、哀れなロバートソンの奴。あいつと話さなくっちゃならないな。それにトム・ジェラルドが3人の子持ちだって。こりゃ驚いた。才能のある人間が、トムも昔は才能があったがなあ、どうしてそんな風にして自らハンディを背負い込むのか俺には理解できないよ。最近では男は結婚しないんだ、成功するまではな。」

しかし当時、地元住民の心は、最終的には国民的関心に発展したあるひとつの問題に捕らわれ始めていた。炭坑地方一帯では、差し迫った労働ストの話で持ち切りだった。キャタリックは、そのすぐれた回復力のおかげでまもなく重病を克服し、近所を歩き回って炭坑労働者たちと会話を楽しむのだった。かくして、それは当然の成り行きだったが、彼はある日坑夫の一団に向かって熱弁をふるい、現代における労働者の自由の原則を説いていた。興奮の面持ちで帰宅した彼は、暖炉の前で母と妹に向かって自分が行った大衆演説を繰り返した。

「そんな風に話してまわるのは大きなまちがいだよ。」母は断言した。「おまえ、大変なトラブルの元になるかもしれないよ。」

「きつとね。」そう答えて、アンドリューは自分が煽動者の能力があることをそれとはなくほのめかすのだった。

「そんな人たちにストを挑発するなんて、兄さんの仕事でも何でもないでしょ。」妹は怒鳴りつけた。「そんなこと聞いたら、わたしたちの友だち何て言うかしら。」このひと言はアンドリューの決意を固めさせた。遅かれ早かれ、確実にストは起こるだろう。ストを起こすことに一役買う、それ以上に俺の休暇を有益に過ごす方法があるだろうか。世間の目はただちに自分に向くだろう。細心の注意と技術を払ってやれば、地元以外にも自分の名が知れ渡る可能性だってある。それに、もしそうやって新聞ネタができたとしたら、すべてが自分の手柄ということになる。

マブルベックから約1マイル離れたところに、

「ピット・ロウ」⁽⁵⁾と呼ばれる炭坑労働者の住宅街があった。それは炭坑に隣接した黒土の上に、文字通り一列に並べて建てられた長屋だった。薄汚れた小さな箱のような住居で、すべてが全く均一の造りだった。表には申し訳程度の庭があり、そして裏にはれんがが塀で囲まれた小空間があり、そこではシャツやペティコートが煤けた風にはためいていた。アンドリューは彼の運動をピット・ロウで始めようと心に決めた。ある日曜日の朝、彼はそこへ出かけ、道端での偶然の会話を通して知り合いになっていたサム・ドロップという坑夫を訪ねた。サムは地元出身の煽動者だったが、炭坑労働者の権利に関して自分とまったく同一見解を持つロンドンの紳士と共謀できることを得意に思うのだった。いとも簡単にふたりはピット・ロウの住民たちを集めることに成功した。演説が行われた。アンドリューは一、二のセンテンスを聴衆の方言で喋ることにより大きな得点稼ぎをした。彼はさらに話を続け、マプルベックが彼の出身地であることを聴衆に確信させた。「私は決して妨害者としてここに立っているのではありません。子供の頃から、土の下で働いておられる皆様方の苛酷な運命に対して私は同情の念を禁じ得ませんでした。幸い運命は私の味方になってくれ、私は脇目も振らぬ厳しい努力のおかげで今や首都の新聞業界ではある程度の名声を博すに至っております。従いまして、私はこうして故郷に戻り、わが旧友たちと手に手を取り合い、資本家たちの強欲と戦うことこそが唯一の義務であると感じております。」

彼はまもなく自分の行ないが世間にどれほどの影響を与えたかを知ることとなった。尊敬すべきマプルベックの住民たちは、彼が本来は何の関係もない騒動に思慮分別もなく不当に干渉していることを怒りを込めて語るのだった。母親の友人たちは、彼女が息子の政治運動をどれほど好ましく思っていないかを知っているだけに、彼女を慰めにやって来た。

アンドリュー自身は街で老紳士に呼び止められ、もし君の立派なお父さんが生きておられたら君の行いをどう思うだろうかと厳しく咎めら

れ、もしどうしても災いを振り撒く必要があるのだったら、他のところへ行って演説をやってくれと叱責された。自らを「独立紙」と呼び、全読者の歓心を買おうとしている町で唯一の新聞は、労働争議に対する外部者の干渉を暗に非難する記事を載せた。アンドリューは長い手紙でそれに答え、それは次の週に活字となった。その中で、彼は十分な経済的、道徳的根拠に基づいて自らを正当化するのだった。彼は主張した。このような機会をとらえて現代社会制度の忌まわしき残酷ぶりに対する抗議を行うことこそがあらゆる知識人の務めである、と。自分は熟慮のうえで自らの衣を脱ぎ捨てた、今後は、背負った以上は十二分な責任感を持ってこの仕事に取り組み覚悟だ、と。そして、自分はこの地域の炭坑労働者の状態を入念に調査したと言ってもよい、その調査結果はまもなく進歩的意見で通っている主要紙のうちのひとつで公にされる予定であるとも書いた。

地元新聞だったらそう表現しただろうが、彼の「軽やかなペン」は二、三のセンセーショナルな記事を書き上げ、まもなくロンドンの夕刊紙に掲載された。その新聞はマプルベックの住民たちからも買い求められた。州が発行している新聞に出たコメントは共感か非難かのどちらかだった。アンドリューはちょうどこの時期に帰省したことを喜んでいて、マプルベックの連中は自分のことをとんでもない奴だと思うだろう。ストが実際に起きるのが待ち遠しい。もしそうなれば、自分はほんの少しの努力だけで地元以外にも名が知れ渡るような役まわりが演じられるかもしれない。

一方、ロバート・ホールズワース氏は、将来の身内となる人物のこのたちの悪いいたずらに猛烈な憤りを感じていた。この思慮分別ある若者は、アンドリューが何不自由していないすべての地域住民たちの非難を一身に浴びている時に、キャタリック嬢との結婚を祝おうという気持ちにはとうていいなれなかった。彼は気持ちを正直に打ち明けるために婚約者の家を訪ねた。パーサは、彼の厳重な抗議に当惑し、結婚は来年まで延期しましょうと提案せざるを得なかつ

た。

「兄さんには何を言っても無駄よ。本当にひどい自分勝手なんだから。もうこれ以上兄さんを家においておくわけにはいかないって、母さんから言って欲しいわ。」

「ほくも同感だよ。」ホールズワースは語気を強めた。「君の兄さんのやる事にはただただあきれるばかりだよ。君の母さんはその後始末に参ってしまうだろうさ。」

アンドリューは血火の十字架⁶⁾を持って出かけていた。彼が夜遅く戻った時、母と妹はふたりで必死で彼に訴えるのだった。あなたは人々にどれだけの迷惑をかけているのか少なくとも分かっているの、演説に駆け回るほどの元気があるんだったらとっととロンドンに帰ってよ、と。

「俺はここに居る義務があるのさ。」新聞記者は自分を抑えて答えた。「興味本位だけでなく義務感からも、俺はいったん取り掛かったこの仕事から手を引くわけにはいかないんだ。でも、もちろん俺はこの家に残っている必要などない。母さんたちが言うことは全部認めるよ。だから俺は明日下宿を捜して回るつもりだ。」

母親はこれに同意するわけにはいかなかった。そして議論は果てしなく続いた。アンドリューは言った。俺は、妹のバーサが置かれている窮地が理解できるにしても、俺の自己犠牲的宿命には逆らえないんだ、俺は家庭の安らぎを捨ててどこか近くに下宿するつもりだ、と。彼がこの決意を誰彼に言いふらすつもりだということも明白だったので、母と妹はそれ以上彼のあきれた主義主張を相手にするのを諦めた。

そして翌朝、この決意は実行に移された。アンドリューは心の中に美德の輝きを感じていた。彼の行いが十分な節操に欠けていたと非難することは誰もできまい。彼はホールズワースに心打つ手紙を書き、自分がどれほどの犠牲を払っているかを説明し、その犠牲の利点をとうとうと述べ立てるのだった。弁護士はそれに対して、わずか一、二行の形式的儀礼の返事を出しただけであった。

キャタリックには煽動者の素質があった。彼の大衆演説は流暢で勇敢だっただけでなく、

ちょっと目にはアンドリューだとは思えないような誠心誠意の感情を吐露していた。自ら苦難を味わって来たせいで、事実アンドリューは雇用の資本家に対する憎しみに共感することができた。その性分ゆえに彼は民主主義にのめり込んでいった。彼の関心はすべて近代闘争思想にあった。一方、ロバート・ホールズワースは彼のことを口の減らない大ボラ吹きとみなし、その才能も、その行動の動機も認めようとはしなかった。しかし、この法律家がたまたま発見したアンドリューの弱点があった。そして彼は巧みな策略を用いてそれを攻撃してやろうと決意した。バーサは、兄のことをいつか彼とふたりきりで話した時、少年時代の兄さんはお世辞にも勇気があるとはいえなかったのよ、と語っていた。

「何か暴動が起これば、」彼女は話した。「きっと兄さんは一目散に逃げ出すと思うわ。兄さんが震え上がるような出来事がないのが残念だわ。まもなく仕事でロンドンへ帰ることになると思うの。」

ホールズワースは黙ったままであったが、心中何かをたくらんでいた。

それから二、三日後、アンドリューは、ペンの持ち方もまるで知らない人間によって書かれた、乱暴な、のたくる筆跡の一通の手紙を受け取った。内容は完全には判読困難だったが、おおむね次のように書かれているようだった。

「キャタリック氏よ、俺たち3人は今夜おめえに手紙を書くことに決めた俺たちや炭坑で働いて女房と子供がおる俺たちや女房子供が飢え死にするのを見たくはねえそれでなくなつて俺たちや貧乏なんじゃぞストで状況が良くなるなんてありっこねえだからもしこの連中がストを起こしたら俺たちやおめえにそれ相応の戒めを与えることに決めた俺たちやおめえの命を脅すなどと言ってるんじゃないかねえしかしおめえが生まれてから一度も味わったことがねえほど痛え目に合わしてやるからなこん棒を3本用意しとるもしそれで俺たちが牢屋にぶち込まれたとしても女房子供に食わせるパンがかえって増えることになるだから覚悟しとけよ」

この同じ日の朝、アンドリューは隣の州でストがすでに始まったことを知った。1日、2日の間に大部分の坑夫たちが仕事を放棄したに違いない、そしてきっとマプルベック周辺の連中もこのストに加わるだろう……。彼らは殊に気性の荒い連中で、アンドリューも良く知っているように、自分たちの腕力を雇い主たちに対してしきりに試したがっていた。

と同時に、そのうちの幾人かは、食糧が無くなることと暖炉から火が消えることを予測していて、彼らをたびたび失業状態に追い込む斡旋業者を密かに呪っていることもアンドリューは知っていた。そして、彼にとってはこの匿名の3人から来た手紙は間違いなく真の脅しであるように思えた。まさに程度をわきまえた脅し、それは彼にとっては打撲傷と侮辱の恐怖だけだった、であるということがかえって不安をもたらした。長い間彼は手紙を手を持って座って、不安げに考え込んだ。

消印はマプルベックだった。この3人がどの炭坑で働いているのかを特定することは不可能だった。彼の心の中の目は、煤で汚れたすべての顔を次から次へと見渡していた。そしてその目は、掘り返されて白肌が出た炭坑の至るところに敵意を見るのだった。

最初は、当然のごとく彼が今さらされている身の危険を公にしようという衝動が起きた。それは誇り高き瞬間になるに違いない。彼は言うだろう。「このいまわしい手紙を見てください。このような卑劣極まる脅しが、私の目的を瞬時たりともぐらつかせると皆さんは思いますか。いいですか、私はこれを引き裂いて風の中に撒き散らしてやります。」と。マプルベックの知人たちは、彼のこのような脅迫を一笑に付す無関心を賞賛し、とにもかくにも彼のこともっと話題にするように違いない。「あいつは脅迫状を受け取っている。雇われのごろつきどもが、あいつを半殺しの目に合わせると断言したんだ。」と。しかし自分は、実際のところ無関心のままでいられるだろうか。地元の坑夫たちが皆仕事から離れている時に、脇道をうろついたり、暗い夜道を下宿に帰ったりできるだろうか。俺は

このスト期間中に名を上げて、そしてロンドンに新聞記事を送りたい。そのためには俺は絶えずあちこち動き回る必要がある。だとしたら、俺は敵どもに待ち伏せの機会を十分与えることになる。しかし、公人ならばそれくらいのことは覚悟する必要があるはしないだろうか。労働争議に参加する者が、どうして暴力からの身の安全など期待できようか。もし奴らが俺を叩きのめしたとしても、おそらく奴らは逃げはしないだろう。そうすれば、ここで再び俺は大きく名を上げることができないではないか。

その通りだ。しかし殴られること自体が……。3本の大きなこん棒で武装した、俺を半殺しの目に合わせることしか頭がない、3人のごつい坑夫たち……。当分の間、俺の骨はズキズキ痛むだろう、きっとそうだ。アンドリューは少年時代でさえも殴られた経験は皆無だった。彼は一度も喧嘩をしたことがなかった。というのも、妹がはっきり認めた通り、肉体的勇氣は決して彼の強みではなかったからである。考えれば考えるほど、彼の額に冷や汗のしずくが流れ落ちるのだった。

当分の間この手紙はポケットにしまっておいて誰にも話すまいと彼は決意した。

彼は街中に出向き、町を代表するホテルのバーの一室で仕事仲間と約束通り会った。「大ニュースだぞ。」失業中の地方記者であるこの友人は叫んだ。「ベイカー炭坑で今朝予告が張り出されたんだ。これでまちがいなくストは起こるぞ。夕方までには奴らは皆ストに突入する。俺たちやすぐ飛んで行く必要があるぜ。」

アンドリューは背筋にゾッと寒気が走るのを覚えた。

「実は、いまいましい厄介事があるんだ。」彼は吐き捨てるように口を開いた。「編集長から手紙が来てな。俺にすぐにクレッグ・ヴァレイ地区に行ってくれないかって言うんだ。俺はこの成り行きを見届ける必要があるってことを、返信の電報で告げようかと半分本気で考えているんだが。」

しかし、この友人はそれは軽率なことだと思った。彼自身の野望がキャタリックのそれと幾

分衝突するところがあって、彼はこの情熱的演説家がクレッグ・ヴァレイかどこか他の場所へ行ったとしても残念には思わなかったであろう。

「ああ、なんと厄介な事だ。」アンドリューは繰り返した。こん棒で武装した俺の敵どもは、ベイカー炭坑でのスト宣言の後、果たしていつ戦の道に踏み出して来るだろうか、と不安にかられながら。たぶん今晚奴らは自分を待ち伏せしているだろう。「俺はやはりここにしようかな。」アンドリューは呟いた。

彼はウィスキーを1杯飲んだ。しかし、そうしても彼の心理状態に何ら影響を及ぼすことはなかった。「ああ、彼は独り言を言った。「これは明らかに神経衰弱のせいだ。俺は病気から回復していなかったんだ。俺は休息が必要な時にエキサイトし過ぎたんだ。なんということだ、手足が震えてる。いや、いや、俺はそんな臆病者じゃない。普段の健康状態だったら、所詮はウソごとかもしれないこの程度の危険に立ち向かうことなど何でもない。こんな連中に俺を攻撃する勇気なんかあるものか。そうだと、奴らだって人生を棒に振りたくはないはずだ。しかし、暗い夜、下宿近くの人気のない道、覆面で隠した顔・・・、たぶん奴らは刑罰を受けることなしにやりおおせるんじゃないだろうか。冷や汗が再び額に吹き出して来た。その間中、彼の友人は編集長の指図には逆らうなど言い続けていた。

「故郷の連中は、」アンドリューは笑顔を作っているのだった。「俺がいなくなったら本当に喜ぶだろうよ。たぶん、俺が犠牲になるのが奴らに対する俺の務めだろう。少しの間俺ひとりだけ考えさせてくれ。おまえはピット・ロウに行けよ。もし俺がすぐにやって来ないとしたら、俺はおまえに手紙で知らせるよ。」

彼は1時間近くホテルに腰を据えていたが、入って来るのは見知らぬ客ばかりだった。やっと、かすかに面識がある某店主が現れた。

「やあ、キャトリックさん、今日はあなたにとっては偉大な日となりましたねえ。ベイカー炭坑の連中がストに突入したって聞きました

よ。」

アンドリューは笑顔を見せたが、すぐには答えられなかった。

「本当ですか。」彼の拭った口からことばが出た。

「とにかく町中その話で持ち切りですよ。そのことは、他の誰よりもあなたの方が詳しいいでしょ。」

アンドリューは立ち上がってうなずき、ホテルを去った。

彼は足早に母親の家に向かった。そしてそこに至る郊外の道すがら、あたりを何度も何度も見回した。雨が降り始めたが、傘もささなかった。母親と妹は暖炉のそばに腰をおろして、石炭代のことを話し合っていた。彼が突然入って来た時、というのは彼は玄関のベルも鳴らさずにいきなり入って来たのだが、ふたりは驚いて不安げに腰を上げた。

「一体何があったの。どうしてそんな顔してるの。」

「何でもないよ。俺の仕事はもう終わったんだ。ただそれだけさ。だから俺はこの町を出て行くよ。」

「まあ、それは良かった。」バーサは叫んだ。

「どこの坑夫たちもストに突入したんだ。母さんたちには石炭代が跳ね上がって気の毒だけど。」アンドリューはけたたましく笑った。「でも気にしないでくれ。俺はクレッグ・ヴァレイに飛んで行かなくちゃならないんだ。戦場さ。ロンドンから電報が来たんだ。俺はここでできることはすべてやった。バーサ、俺の頼みを聞いて欲しいんだが。」

「ええ、いいわ。」

「俺の下宿へタクシーで行って、荷物を全部まとめて、駅の手荷物預かり所に預けておいてくれないか。それで俺が要求するまで領収書を取っといてくれ。俺は列車に乗らなくちゃならないんだ。俺はここにいてこの騒ぎを見届けようと思ったんだが、もし行くのを断ったら大切な人物を怒らせることになるんだ。それに、おまえと母さんもその方が嬉しいだろうし、俺は行った方がいいんだ。ホールズワースに事情を

説明しておいてくれないか。彼にさよならを言えないのは残念だが。でもバーサ、おまえの結婚式には帰って来たいと思っている。いや、むしろお呼びでないかな。ああ、ああ、よく分かっているよ。何も迷惑はかけはしないから。いつかはおまえもつと心が広がるだろう。じゃあな。一刻も無駄にはできないんだ。」

そう言うなり、アンドリュースは飛んで出て行った。

数日後、ホールズワースはマプルベックにやって来た。彼は、バーサがすでに手紙で書いて来たことを口でもう一度説明するを、まじめな笑いを浮かべて聞いていた。

「それで、兄さんはあわてふためいて出て行ったのかい。」

「ええ、まともにしゃべることもなしにね。今朝、兄さんはロンドンから手紙をよこして来ることになっているの。手紙を受け取ったら、わたし、兄さんの荷物を送ってあげなくちゃならないの。」

「ロンドンからだって。兄さんがそんなに早く新聞記事を書けたなんて、こりゃ驚いた。」

「刺激が強過ぎたって言ってるわ。兄さん、また病気になっちゃったの。」

ホールズワースは、自分の仕掛けた策略がこの煽動者を追っ払ったのかどうかは定かではなかった。アンドリュースの説明はすべて本当かもしれない。しかし、あの脅迫状を受け取ったにちがいないまさにその日にしっぽを巻いて逃げて行ったとは……。しかもベーカー炭坑でストが始まったまさにその日に。どちらにせよ、奇妙で愉快的偶然の一致だ。

(使用テキスト George Gissing, "The Firebrand," *Human Odds and Ends: Stories and Sketches*, London: Sidgwick & Jackson, 1911, pp. 38 - 55.)

訳注

- (1) マプルベック (Mapplebeck)
架空の市。ギッシングの生まれたウェイクフィールド (Wakefield) がモデルとなっている。
- (2) 市書記官 (town-clerk)
通例法律家で法律問題の助言もした。1974年に廃止。(研究社新英和大辞典第5版より)
- (3) アンチョビー・トースト (anchovy toast)
アンチョビーは地中海に多産する魚。(同上)
- (4) ヴァシュ・アンラジェ (Vache Enragée)
フランス語。
- (5) ピット・ロウ (Pit Row)
ウェイクフィールド郊外の村ニュー・シャールストン (New Sharlston) にあるロング・ロウ (Long Row) がモデルとなっている。
- (6) 血火の十字架 (fiery cross)
昔、スコットランド高地で戦争開始を知らせ兵を集めるために、部落から部落へ走者によって運ばれた十字架で、一部を焼いたもの。時には山羊の血にひたされた。この故事に由来する。(新英和大辞典)